

日本NPO学会ニュースレター

2016年3月
Vol.17 No.2 通巻65号発行日：2016年3月 発行人：田中弥生 日本NPO学会事務局：〒062-8605 札幌市豊平区旭町4-1-40 北海学園大学法学部 樽見弘紀研究室
TEL：070-6565-9789 URL：http://janpora.org/ E-mail：office@janpora.orgなぜあなたのキャリアが
NPOで彩られるようになったのか
～第18回年次大会に寄せて～

第18回年次大会運営委員会委員長(同志社大学社会学部教授) 浦坂 純子

まだ2015年も押し詰まらぬうちからこの原稿を書いている。それだけ運営委員長に余裕がないことの表れである。恐らく罰が当たったのだろう。そもそもこれまで一学会員として自分のことしか考えたことがなく、幽霊理事と幽霊運営委員を1回ずつやっただけでいきなり運営委員長は荷が重すぎた。加えて今回から事務局体制が激変している。この非常事態で大過なく大会が終えられたとしたら、それはひとえに運営委員をはじめ関係者の皆さんの献身的なご尽力の賜物である。

言うまでもなくNPO活動は「多様性」がキーワードであり、実に多様な活動が展開されている。にもかかわらず、参入者は比較的限定されてきた。非営利で公益的な活動を旨とし、活動の基盤となる財政面が脆弱になりがちであるため、時間的・経済的に余裕のある者(さらには意識高い系?)が無償で活動を担わざるを得なかった。そのことが、マジョリティには「自分には関係ない」「自分にはとてもできない」という隔たり(距離感)を生じさせる側面があったのではないかな。

現役世代は、就業によって生計を立てなければならないが、その就業のあり方もまた変化に晒されている。既存の就業の枠組みに適応できない者を労働市場から排除しては、職場も社会も立ち行かなくなっていることから、近年は柔軟な働き方や個別事情に応じた働き方の選択(シフト)が認められるようになりつつある。そのような変化は、「食べるためには仕事をするしかない」「NPO活動に注力したければ仕事を辞めざるを得ない」という二者択一ではなく、双方を視野に入れながら社会に自らの活躍の場を見出すことを可能にするだろう。

実際、人々の意識の変わりようも著しい。就業とNPO活動との線引きが曖昧になり、それらを融合したソーシャルビジネスへの関心が高まっているのも一例である。人々のワークキャリアとライフキャリアの両面において、NPO活動がどのように位置づけられるようになってきたのかは、就業の多様化と表裏一体の関係にある。NPOにイノベーションをもたらす「人材の多様性」は、いかにして実現できるのか。それは人々の働き方、生き方の充実を通じた社会的厚生の上に資するのではないかな。誰もが自らに適した形でNPOにかかわることのできる環境整備について、特に次世代を担う若者たちと議論し、共有したいという思いから、今回の公開シンポジウムの着想に至った。

大学のまち・京都で、バトンを受け継ぐ若者たちに伝えていただきたい。なぜあなたのキャリアがNPOで彩られるようになったのか。そして、それがどれほどの手応えと豊かな時間をもたらしたのか。今回、初の試みとして学生セッションを設けた。この学生セッションに挑戦した若者から、20年後、30年後の運営委員長が生まれることを夢想している。

皆さん、うらかな春の京都・同志社大学へようこそ。充実のプログラムで最高のおもてなしをお約束いたします。



contents

目次

巻頭言 浦坂純子	1	ディスカッション・ペーパー制度ご利用案内	13
第18回年次大会の「目玉」 石田祐	2-3	Information	14-15
NPOと政治 今田克司	4-5	NPOの風景 初谷勇	16
国際学会デビューへの道 岡田彩	6-8	年次大会の参加申込はお済みですか?	17
『ノンプロフィット・レビュー』投稿論文募集	9	JANPORA図書館	18-19
7つの質問 中島清文さん	10-11	新会員の紹介 菊池遼	20
日本NPO学会入会のお知らせ	12		

年次大会 コラム

第18回年次大会の「目玉」

大会運営委員会

第18回年次大会では、浦坂純子大会運営委員長を中心とした大会運営委員会で多くの議論を行い、意欲的に様々な取り組みが進められている。その中から大会の目玉となるものについて紹介したい。

◆学生セッション

最初に「学生セッション」を取り上げたい。日本NPO学会としては初めての試みであり、特筆すべき取り組みである。主に学部生や大学院修士課程の学生を対象とし、「ゼミや社会貢献活動等の取り組みの成果をNPOや社会貢献、ボランティア等にかかる研究・実践報告として、学会という場で社会発信しよう！」という呼びかけのもと開催されることになった。演習や卒業研究という伝統的に行われている学生の活動に加え、近年多くの学校において採用の増えている調査実習やフィールドワーク、PBL (Project Based Learning) など、アクティブ・ラーニングによる活動を始めとする、活動成果の報告が、二日間を通じて計9つなされる。

大会運営委員会でこのセッションを設けることになった動機についても紹介しておきたい。心は、将来的に日本NPO学会の領域に強く関わるような研究者や実践者となる人材を育てていきたいというものである。運営委員会では、学生時代の学会経験が大きく寄与するのではないだろうかということが、大会運営委員の個人的な経験も踏まえて議論され、是非やろうということになった。長期的なビジョンを持ったセッションの開催であり、ご参加の皆様には、育成を視座とした建設的なコメント等を学生に対してお願いしたい。

◆院生対象アカデミック・セミナー

もうひとつ長期的な影響を見込んで開催するセッションがある。「院生対象アカデミック・セミナー」である。

昨今の教育・研究職の就職環境は、需要と供給の問題だけでなく、教育・研究機関が対峙する社会環境の変化によって、いわゆる研究業績だけでなく、実に多様な知識やスキルが求められている。大学院生を応援するこのセミナーでは、

「先輩」となる若手研究者らが、アカデミック・ポートフォリオとなるもののうち研究のことを中心に物語る。また、セミナー後の昼休憩の時間を活用して、年次大会初の試みとなる「お悩み大相談会」も企画。今後求められる知識やスキル、就職活動やプライベートとのバランスの取り方などについてフランクに話をする時間となる予定である。

日時	日時: 2016年3月5日 (土) 11:45-13:15 [お悩み大相談会(軽食あり) 14:20まで]
トピック	①研究倫理/アカデミック・インテグリティ ②ノンプロフィットレビューの査読プロセス ③論文執筆のコツ ④英語論文執筆のススメとコツ ⑤国際学会参加のススメ
パネリスト	松永佳甫・小田切康彦・太田響子・岡田彩

◆エクスカーショ

京都ならではのまちなかフィールドワークがエクスカーションとして企画されている。「学会フィールドワーク企画～老舗、お寺、NPOを訪ね、京の市民社会を知る～」は、年次大会の前日に、京都の文化を体感することできるように設計されている。京町家、老舗、お寺、NPOなどを訪れ、それぞれの主体がどのように京都のまちづくりに関わり、都の文化を育んできたのか、まちの中心部を歩きつつ、キーパーソンの講話や解説を聞きつつ、京都の魅力を五感で感じて学べる充実した企画である。

日時	2016年3月4日 (金) 11:30-18:30 (交流会-20:30) 【全行程申込制(※既に満席の可能性あります)】
テーマ	学会フィールドワーク企画 ～老舗、お寺、NPOを訪ね、京の市民社会を知る～
訪問場所	・秦家住宅(京町家、昼食:京都のおばんざい) ・錦市場・京極(新京極) ・NPO法人京都コミュニティ放送 ・平野とうふ ・浄慶寺 ・遊子庵(京町屋、NPO法人遊プロジェクト京都) ※詳細はホームページを参照されたい。

◆公開シンポジウムのスピンアウト企画

公開シンポジウムについては、リーフレットやホームページで多くが紹介されているので、目的だけ振り返った上、ここではこれをもとにしたスピンアウト企画について紹介したい。

公開シンポジウムでは、人材の多様性の実現によるさらなるイノベーション、人々の働き方や生き方の充実を通じた社会的厚生の向上を目指した環境整備を議論することが目的となっている。大きな会場での議論だけでは消化不良であったり、もう少し議論したかった、というのはよくある話である。今大会では、公開シンポジウムの登壇者にも重ねてご協力いただき、新たなパネリストも加えて、公開シンポジウムを振り返りながら、さらにNPOの働く場としての可能性とキャリアの発展について議論を行うスピンアウトの企画がなされている。

日時	2016年3月6日(日) 11:45-13:15
テーマ	NPOの働く場としての可能性を探る ～公開シンポジウムを振り返って～
モデレーター	小野晶子
パネリスト	高橋泰子・田中尚樹・豊島亮介・浦坂純子

◆大会運営

北海学園大学に置かれている学会の総務担当事務局の尽力によりホームページが今風に刷新されたことに合わせて、年次大会関係でもできるところから(実際には走りながら進めているため、時間的に間に合ったところからというのが正確なところであるが)、発表者にとって簡便で利用のしやすい手続きへと形を変えつつある。

また、今回初めての試みとして、ARNOVAを参考にしながら、モデレーターとコメンテーターという大変な役割について公募したところ、15名の方々に早々に手を挙げていただいた。NPO学会の誇りではないかと感じている。15名のお名前については報告概要集に掲載されている。是非学会で声をかけていただきたい。加えて、多くの理事にもモデレーターとコメンテーターを担っていただくことになっている。ここで皆様に感謝の意を表したい。

◆研究報告・実践報告・パネル

最後になるが、学会の年次大会における最大の目玉は日頃蓄積してきた研究成果や実践成果の発表であり、そこでの議論による研究の深化や実践の進化である。

今大会は近年の大会の中で見ると研究報告・実践報告の数が多いのの特徴である。深く追究した研究成果について活発な議論をしたい。パネル報告では一つのテーマをめぐるパネリストによる報告や議論が行われる。公募パネルおよび大会運営委員会企画パネルでは、今議論したいことや今重要であると考えられることを提案者が考え抜き、90分のセッションを企画している。すべてのセッションで会員皆様の参加による活発な議論が行われ、それをもとに数多くの社会発信がなされることが期待されるところである。

こう見ると目玉だらけの大会である。皆様、京都・同志社大会へ是非ご参加を!!

大会運営委員会

委員長 浦坂 純子(同志社大学)

委員 石田 祐(明石工業高等専門学校)
岡田 彩(同志社大学)
小野 晶子(労働政策研究・研修機構)
小田切 康彦(徳島大学)
鈴木 康久(京都府)
永田 祐(同志社大学)
馬 欣欣(一橋大学)
松浦 さと子(龍谷大学)
森山 智彦(下関市立大学)
八木 匡(同志社大学)
山内 康敬(京都新聞社)



同志社大学提供

NPOと
政治市民活動の政治性
～世界の潮流と起こりつつある日本の変化

第2回

本学会の「NPOと政治」スタディグループは、2015年3月の年次大会の運営委員会企画として、「NPOと政治」に関連するセッションが複数成立したことに端を発している。スタディグループの趣旨やこれまでの活動については別に記載する機会もあると思うので、ここでは呼びかけ人のひとりとして前回の岡本仁宏氏（関西学院大学）につづき、このトピックに関する自らの問題意識を明らかにしてみたい。

一般財団法人CSOネットワーク代表理事
認定特定非営利活動法人日本NPOセンター常務理事
CIVICUSシニア・アドバイザー
今田克司



市民活動の政治性

国際的な市民社会の議論においてはなかなか前提として受けとめられることでも、日本のNPO/NGOを取り巻く言説ではその前提が抜け落ちてしまっていると思わされることがある。人権をめぐる議論はその代表的なもので、日本では、人権はあたかもNPO/NGOの活動の一分野のように位置づけられているが、国際的に見れば、人権の保障はあらゆる分野の市民活動に通底して欠かさないもので、開発・国際協力の分野においては権利ベースのアプローチ、環境分野においては環境正義などの概念に人権思想が強く表わされている。

市民社会の活動を保障するという文脈における人権は、特に言論・集会・結社の自由などの基本的な権利に集約される。市民社会の影響力が強く、政府がそれを快く思わない場合、これらの権利を制限しようというベクトルが働く。そういった綱引きにさらされるなかでは、市民活動はおのずから政治的にならざるを得ない。

CIVICUS: World Alliance for Citizen Participation という市民社会強化のためのネットワーク組織については、本ニュースレターでも何度か書かせていただいたことがある。筆者は、2007-13年の5年半のあいだ、その本部ヨハネスブルク（南ア

フリカ）を拠点に、CIVICUSが各国パートナー団体と連携して展開する各種事業のコーディネート機能を果たしていた。

CIVICUSが活動の中心として進めているテーマに、各国の市民社会が活動する社会環境を確保し、これを制限しようとする動きに警鐘を発するものがあり、これをシビックススペースの保護活動と呼んでいる。2005年頃から開始したCivil Society Watch事業からはじまり、複数の市民団体との共同作業で国連人権理事会における平和的集会・結社の自由の権利に関する特別報告官の任命を果たし、その活動の支援を行ったり、他にもライフラインCSO支援基金、日本も参加する政府間組織である民主主義共同体の市民社会ワーキンググループなどで、国際社会に対し、市民社会の活動環境を保障することの大切さを訴え続けている。

“脱色された”市民活動の日本

このような世界の文脈から眺めると、日本のNPO/NGO活動はこういった活動の大切さを共有していないのではないかと映ることが多い。日本に来て、シビックススペースの保護活動について説明しても、これまではいわゆる人権分野で活動する人以外で

ピンと来る人が極端に少なかった。ロシアで、中国で、カンボジアで、シビックスペースを制限するような法制度・施策が審議されたり実践されていると言っても、それは「対岸の火事」であり、自分たちには関係のない話題だと思ってしまう。

関連して、日本においては、NPO/NGOなどの市民活動が政治的メッセージを発したり、政策提言活動を行ったりすることを忌避する傾向が見られており、いわば“脱色された”市民活動が主流になってきた。その理由を現代のNPO/NGO活動が、1960-70年代の市民運動のアンチテーゼとして成り立っているからと見る向きは多いが、理由はともかく、これは日本の特定非営利活動促進法（NPO法）以降のNPO/NGO活動を彩るひとつの特徴であるといえよう。

民主主義の危機とNPO

ところが、こういった状況に変化が起きつつある。もちろん、それは昨今の日本の政治・社会状況と無縁ではない。筆者が目加田説子氏（中央大学）とともに、2015年の年次大会で運営委員会パネル「民主主義の危機とNPO」を企画したのも、民主主義の担い手としての市民、市民が使う道具としてのNPO/NGOに着目したためである。政治性を帯びたNPO/NGO活動をあらためて意識すべき社会状況が出現しているという時代認識であった。



12月1日のフォーラム「NPO法と政治活動についてあらためて考える」のパネルディスカッションの様子

その後、12月1日、NPO法施行日の記念フォーラムとして、シーズ・市民活動を支える制度をつくる会と日本NPOセンターは、「NPO法と政治活動についてあらためて考える」を開催した。これに先立つ10月21日に、日本NPOセンターは、「市民活動団体による活動を不当に制限しようとする動きへの懸念～さいたま市議会の市民活動サポートセンターに関する条例案可決を発端として」という意見書を公表しており、フォーラムは、NPOと政治活動について考える機会を提供することを目的とした。意見表明には2700件を超えるFacebookのシェアがつき、この問題に対する関心の高さを物語るものとなった。フォーラムでは、NPO法における政治活動の考え方や市民活動団体が行ってよいとされる政治活動の線引きについての議論が中心となったが、そういった法制度上の話題を超えて、本来の市民活動の政治性についての意識喚起を試みた。

このように、日本でもなかば必要に迫られる形で、政治とNPO/NGOの関係を考えなければならない時代が到来している。一方、アジアやグローバルなレベルでのシビックスペースの制限についての議論はめまぐるしく展開している。今後とも、この問題に関し、日本国内の意識喚起を進めるとともに、海外市民社会との交流を促進していきたいと考えている。



11月上旬にソウルで開催されたWorld Movement for Democracyの会議におけるAsia Democracy Network (ADN) のセッションで、アジア各国におけるシビックスペースの制限の状況を意見交換するパネリスト(写真提供:ADN)

第2回 国際学会デビューへの道

同志社大学政策学部助教 岡田彩



採択されるアブストラクトのコツ

8月のISTRアジア太平洋地域大会、そして11月のARNOVAで
ご一緒させていただいた皆さま、おつかれさまでした。連載第1
回で記した「お祭り」のような雰囲気、エンジョイされましたでし
ょうか。

今回は、国際学会での報告に応募するステップに進んでみ
たいと思います。前回同様、NPO研究を主題としている2つの学
会、Association for Research on Nonprofit Organizations and
Voluntary Action (ARNOVA) と International Society for Third
Sector Research (ISTR) を念頭に、応募時に求められるアブ
ストラクトの「コツ」を考えていきます ※1。

※1 主な応募方法として「個別論文」と「複数人によるパネル」と
いう二つの形式があります。今回は、多くの大学院生や若手研
究者が選択すると考えられる「個別論文」への応募を想定して
います。

アブストラクトとは？

アブストラクトとは、研究論文の「要約」です。どのような問題
に対し、どのような手法を用いて、何を明らかにするのか。そうす
ることによって、どのような意義があるのかを示す文章になります。

国内の学会同様、学会によって求められる分量や内容には、
若干の差があります。表にまとめた通り、分量という点では、
ISTRの方がハードルが低いと言えるかもしれません。ARNOVA
の場合は、まず要約の「要約」を簡潔に記し、これをさらに説明
するというスタイルです。

	ARNOVA	ISTR
大会開催 時期	例年11月	例年7月～8月 (隔年で全体大会と地域大会)
申込時期	同年の春 (2016年は2月1日～4月4日)	前年度の秋 (2015年は10月26日)
分量	①100 wordsの要約 (abstract) ②1000 wordsの説明文 (narrative) ※参考文献3～5つを含む	500 words以下 ※2015年の場合、 参考文献ははみ出してもOK
提出方法	専用ウェブサイト内にて 所定のボックスに ①②をそれぞれ記入	専用ウェブサイト内にて 所定のボックスに記入 (余剰分は「備考」ボックスに記入)

採択率を上げる6つのコツ

国際学会には、世界各国から膨大な量の応募があります。
採択率は必ずしも高くはないと考え、審査員が「これは！」と思
うような文章を、限られた単語数で記さなければなりません。
研究の内容もちろん重要ですが、それ以上に「見せ方」の工
夫が重要だと感じています。拙い経験からですが、6つの「コ
ツ」をまとめました。



2015年ARNOVAのClosing Plenaryは、シャンデリアが光り輝く
中、行われました。

コツ① 大会テーマに関連付ける

ARNOVAもISTRも、毎年テーマ (Conference Theme) が定められます。例えば2015年ARNOVAのテーマは“The Dynamic Landscape of Nonprofit Organization & Voluntary Action: Innovation, Inspiration, and Creativity Across Boundaries”、2016年ISTRのテーマは “The Third Sector in Transition: Accountability, Transparency, and Social Innovation”です。いずれも、Call for Participation/Contributionという文書において、テーマの背景や詳細が説明されます。

テーマ自体は、ある一定の方向性を持ちつつも、多様なリサーチ・クエスションを包含するものとなっています。「それなら、別に気にしなくても良いのでは？」と思われるかもしれませんが、大会テーマは「トラック」選びの際の大きなポイントとなります。

トラックとは、NPO研究をさらに細分化した分類を指します。いずれの学会でも、応募時に、自分の報告に適したトラックを選択することが求められます。

以下は、2015年ARNOVAで設定されたトラックです。大会テーマに関するセッションが一番多く設けられているという点にご注目ください。報告される個別の論文が最も多いということですから、大会テーマに沿ってアブストラクトを作成し、このトラックを選んで応募すれば、採択の可能性が高まると考えられます。

トラック名	セッション数
大会テーマ (Conference Track)	39
Boards & Governance	4
Community & Grassroots Organization / Secular & Faith-based	9
Accountability, Effectiveness, Evaluation & Program Outcomes	13
Collaboration & Networks	15
Philanthropy, Fundraising & Giving	28
Innovation & Entrepreneurship	13
Management, Leadership & Strategy	16
Public Policy & Law	7
Teaching & Education	14
Voluntarism & Volunteering	9

出所：2015 ARNOVA Annual Conference概要集より岡田カウント

ARNOVAの場合、大会テーマのトラック以外は毎年固定される傾向にあります。ISTRではトラックそのものが毎年変わります。2014年と2016年の比較だけでも、その変化は一目瞭然です。大多数のトラックは、大会のテーマに沿うものとなっています。すでに取り組んでいる研究であっても、大会テーマを切り口に問題の背景を論じたり、タイトルに大会テーマのキーワードを散りばめるなどの工夫が求められます。

2014年 ISTR “Civil Society and the Citizen”

Theoretical Frameworks and Boundaries of Civil Society
Collaborative Governance and Civil Society
Civil Society and Citizen Participation-Addressing Public Issues
Philanthropy and Giving
Volunteering
The Role of Protest Movements
The Role of Civil Society in the Context of Revolutionary Developments
Legitimacy vs. Legality of Civil Society Action
Developments in Government Policy and the Regulatory Environment
Policy-Making: The Contribution of Civil Society
Civil Society and Democracy

2016年 ISTR “The Third Sector in Transition: Accountability, Transparency, and Social Innovation”

The Third Sector and the Welfare State
Civil Society and Democracy
NGOs and Globalization
Accountability and Transparency
Social Innovation and Social Enterprise
Advocacy and Public Policy
Philanthropy and Foundations
Volunteerism and Co-production
Managing Third Sector Organizations
Emerging Areas and theory and Practice
Research on Teaching Third Sector Studies

出所：2014 ISTR Annual Conference概要集、
2016 ISTR Call for Contributionより岡田作成

国際学会デビューへの道

コツ② 小見出しで必須項目をアピール

各学会では、アブストラクトに含むべき項目がCall for Contributionsに明示されています。ISTRの場合、①大会テーマを反映した仮タイトル、②実証的・理論的背景、③先行研究における位置づけ、④実証的・理論的手法、⑤主たる議論とそのエビデンス、⑥主たる結論と国際的なオーディエンスへの報告の妥当性、を含むことと記されています。大量のアブストラクトを読む審査員の姿を思い浮かべ、各項目を小見出しにするなど、「必須要素をすべてカバーしている」ことが一見して分かるようにしましょう。

コツ③ 誰でも理解できる平坦な文章を

NPO研究の特徴の一つとして、よく「学際性」が挙げられますが、国際学会ではさらにその「幅」が広がります。アブストラクトでは、なるべく専門的な用語や表現を避け、専門分野が異なる人でも理解できるような文章を心がけましょう。まったく分野の異なるネイティブに一読してもらい、意味や意義が伝わるかどうか確認するという作戦も有効です。

コツ④ 専門性のアピールは参考文献のチョイスで

もちろん、自分の専門性も十分アピールしたいところです。専門用語などに頼るのではなく、参考文献(Reference)のチョイスで示すという作戦はいかがでしょうか。いずれの学会も、3～5つの参考文献の提示が求められています。単純に引用したものを載せるのではなく、同じ専門の人に「キーとなる文献はきちんとおさえている」ことをアピールできるものを選んでみてはどうでしょうか。

コツ⑤ 「日本」をアピール

日本を対象とした研究をされている方は、アブストラクトの中でこの点を強調することをお勧めします。分析の視角や枠組は各国に通ずるものでも、日本を取り上げること自体が注目に値するケースも多々あります。ARNOVAやISTRでの報告の中で、日本が事例として取り上げられる研究報告は決して多くありません。それゆえ、大量のアブストラクトの中で目立つポイントとなる可能性があります。

コツ⑥ ネイティブ・チェックを受ける

気軽にチェックを頼めるネイティブが身近にいる場合には、ぜひ一読してもらいましょう。その目的は、英語の「誤り」を直すのではなく、表現を工夫して単語数を減らすことです。表現を少し変えるだけで、容易に10単語は節約できます。空いたスペースで、アピールポイントをさらに付け加えましょう。

2016年 ARNOVAに応募を!

直近では、2016年ARNOVA(11月17日～19日、ワシントンDC)での報告応募締切が4月4日(米東部標準時で正午)となっています。大会のテーマは“Nonprofits, Philanthropy, and Government: Policy and Partnership in an Era of Change”です。詳しい内容は、1月中旬までにホームページで公表予定ですので、ぜひ応募をご検討ください。私も皆さまと一緒できるよう、採択を目指して、アブストラクトの作成に励みたいと思います。

*第18回年次大会(2016年3月・同志社大学)では、「院生対象アカデミック・セミナー」内で本連載との連動企画を行います。大学院生、若手研究者の皆さん、ぜひご参加ください!

<参考URL>

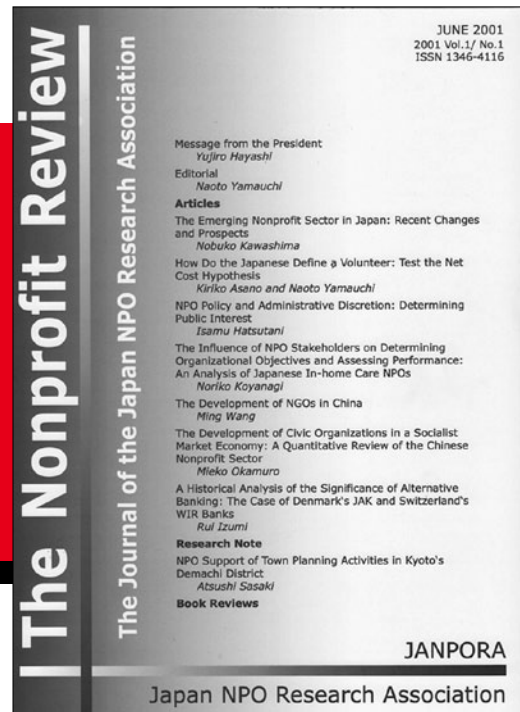
ISTR www.istr.org

ARNOVA www.arnova.org

*いずれもConferenceのタブをクリックして、最新情報をご確認ください。

『ノンプロフィット・レビュー』投稿論文募集

ノンプロフィット・レビュー(The Nonprofit Review)は日本NPO学会の公式機関誌で、NPO研究では日本唯一の専門学術誌です。ノンプロフィット・レビューは、これからもNPO研究の多様性の拡大に積極的に取り組んでいきたいと考えています。あらゆる世代の研究者および実務家の皆様の積極的な投稿を歓迎いたします。特に若手研究者および未来の若手研究者を目指す大学院生の方々には、日頃の研究成果の発表の場として、ノンプロフィット・レビューを大いに活用していただきたいと思います。



■投稿資格

本誌への投稿は、日本NPO学会会員に限ります。ただし、招待論文など、編集委員が特に認めた場合はこの限りではありません。

■掲載論文

NPO・NGO、フィランソロピー、市民社会、社会的企業、ソーシャル・キャピタル、およびこれらの関連領域に関する新しい学術的貢献を含む未発表の研究論文で、関連する様々な制度や政策の科学的、実証的政究、事例研究、あるいは実務的な報告で、日本語または英語で書かれたものとします。日本から世界に向けて研究の成果を積極的に発信するために、英語による論文を特に歓迎します。

■分量

要旨、本文、図表を合わせて、日本語論文は20,000字、英語論文は10,000字を超えることはできません。

■投稿の方法

投稿手続は、オンライン上で行います。

日本NPO学会ホームページより「学術誌」のページ(<http://www.janpora.org/npreview/npreview.htm>)にアクセスしていただき、投稿規程、執筆テンプレート、投稿方法をご熟読の上、投稿してください。

《オンラン投稿先》

<http://www.editorialmanager.com/npr/default.aspx>

■審査

投稿論文の掲載は、編集委員会が委嘱する国内外のレフリーによる査読レポートを踏まえ、編集委員会が採否決定します。

【お問い合わせ】

日本NPO学会

ノンプロフィット・レビュー編集委員会

Email: npo-review@janpora.org

(ノンプロフィット・レビュー専用アドレス)

第2回

あの人にぶつけてみた
7つの質問

第2回：中島清文さん

(三鷹の森ジブリ美術館館長)



なかじまきよひみ

◆中島清文さん略歴◆

1963年、栃木県小山市生まれ。東京大学経済学部卒業後、住友銀行（現・三井住友銀行）に入行。2004年にジブリ美術館の管理・運営を行う財団法人徳間記念アニメーション文化財団（現・公益財団法人）の事務局長に就任。2005年6月に三鷹の森ジブリ美術館館長に就任。

①銀行員からジブリ美術館館長へのご転身。「華麗なる転職」ですか？ それとも「加齢なる転職」ですか？

中島：僕は大学卒業後すぐに都市銀行に勤めました。その後、バブル崩壊後の大変な時期に30代のほぼ全部を費やした訳です。貸付金が返済困難な企業から何とかお金を返してもらうのが仕事でしたからとにかく心身ともに疲れました。幸運だったのは銀行員時代にスタジオジブリとの出会いがあったということ。この時期に知り合うことが出来たスタジオジブリの鈴木敏夫プロデューサーから後に「うちに来ないか」と誘われることになります。平均寿命が80年だとして、後半の40年は金融以外の仕事をしてみたいと思っていた矢先の出来事でした。

②館長ご着任の第一印象は？

中島：あー、ここでは毎日が学園祭なのだ、と思いました。自分自身、高校から大学とバンド活動をやってきたので学園祭は大好き。学園祭の実行委員長をやればいいのだなと理解しましたね（笑）。

③「館長」とはどんなお仕事ですか？

中島：ジブリ美術館は宮崎駿監督のもう一つの作品だと理解しています。監督が「作品」に込めたもの、それは「世の中には面白いもののや美しいものがいっぱいあるんだ」ということ。ここでそれに気づいて持って帰って、という子供たちに対する宮崎さんの思いを伝えていく、というのが館長である僕の仕事と心得ています。子供たちにとってワクワク、ドキドキとした空間が保たれているのか、それをマネージしていくのが館長の一番の仕事ということになりますね。

④ジブリ作品の魅力をどう理解しますか？

中島：スタジオジブリと出会ったのは映画「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」が大ヒットした頃のことでした。その頃の僕の最大の関心は、なぜジブリ作品はこんなにもヒットするのだろう、というものでした。ところが、一度（スタジオジブリの）内側に身を置いてみるとこれが秘密でも何でもなかった。いい作品をつくり、きちんと宣伝をして、真面目に営業をする、これだけ。ジブリはこの3つの基本的なことを、不器用なまでに手を抜かず、とことんやっているということに尽きる。ヒットは目的ではなく結果である、ということがスタジオジブリの強さなのだということを痛感しました。

⑤宮崎駿監督とはどんな方ですか？

中島：ジブリ美術館で展示をつくっている時の宮崎さんは実に少年のよう。「これ面白いだろう？」とか、「こんなのつくったんだけどどう？」とか言ってくる宮崎さんって、喩えれば、十歳くらいの少年が上手に出来た図画工作の類いを大人に見せびらかしているようなものです。しかし一方で、ものをづくり出す厳しさがある。毎回、必ず何か新しいことに挑戦するし、手間暇をかけることを厭わない。そんな場面に出くわすといつも身の引き締まる思いがします。加えて、周囲の人たちに対してサービス精神が実に旺盛な一面も。二人っきりでクルマに乗り合わせるようになった経験が何度かあるんですが、宮崎監督はずっと喋り続けてくださった。一緒にいる人がつまらない顔をするのが嫌なのだと思う。生来のエンターテイナーなのですね。

⑥ジブリ美術館の基本は営利でしょうか、非営利でしょうか？

中島：ジブリ美術館の経営主体は公益財団法人です。従って、当美術館は典型的には非営利なる団体となりますよね。しかし、営利であるか非営利であるかを置いて、ここの経営は実にユニークです。銀行からこの美術館に来て瞬時に理解したのは、ここではお金を「何に」使うのか、がとても大事なのだということ。一般の商業活動はどうやってお金を稼ぐか、を真っ先に考える。ここは違う。「何に」お金を使うか、ということが大事なんです。スタジオジブリがかくも素晴らしい作品をつくり続けてこられたのも実はそれ。アニメーションの制作で一定のクオリティを出すためにはそれ相応のお金が必要というところから入ります。ジブリ美術館も同じ。お蔭さまで日々沢山の方にいらしていただける。すると、我々に常に問われるのは、お金をかけても大事にしたいことがある、ということ。実際、お金を使うのがみんな上手なの、見事に使い切ってしまう（笑）。例えばジブリ美術館では、質感がきちんと感じられるホンモノにこだわる。単なる営利主義では説明しきれない、合理的でないお金の使い方をすることも時として厭わない。全ては子供たちがホンモノの中で何かを感じることを、何かを見出すことが大切だと信じているから。ホンモノだけが持つちからを僕たちは信じているんです。



⑦ジブリ美術館はなくてはならない公共サービスでしょうか？

中島：大きな意味での公共サービスだと思います。「公共的なものでありたい」と常に願っている、という言い方がより正確かもしれません。宮崎駿の思いを、時代を越えて語り継ぎたいと願っています。かつて、僕はマスコミ受けするレトリックとして「ジブリ美術館は奈良の大仏になりたい」と話したことがあるんですが（笑）。宮崎さんの映画は時代を越えて老若男女を問わず広く受け入れられていますよね。例えば、「となりのトトロ」がそうです。同じく、この美術館も公的なもの、みんなのものとして愛されて欲しい、と思います。一日の入場者数を2400名に限定している点からすれば、ジブリ美術館を開かれた公共のものと言い切るのはやや難しい面もある。しかし、常に「公共的なものでありたい」という思いはスタッフ全員で共有されていると思います。（美術館が立地する）井の頭公園との調和や三鷹市との調和というのが常に我々の念頭にあるのもその表れだと考えます。

（構成：樽見弘紀）

日本NPO学会入会のお知らせ

JANPORA

日本NPO学会 (Japan NPO Research Association) は、NPO・NGO、フィランソピー、ボランティアなどに対する実務的、政策的および学問的関心の高まりに応じ、1999年3月に設立された学会です。個人会員数は現在約1,200人で、実務家、大学研究者・学生がそれぞれ半数を占めています。本学会では、相互交流、情報発信の中心となるべく、民間非営利セクターの活動に関心を持つ研究者、実務家および政策関係者の幅広い参加を求めています。

日本NPO学会にご入会されると、大会をはじめとする学会の各種行事への参加が可能となります。また、学会の発行するニューズレター、機関誌（ノンプロフィット・レビュー）などの定期刊行物を随時お送りいたします。（大会をはじめとする学会の各種行事への参加は、招待講演者等を除き原則として会員に限られます。）さらに、E-mailアドレスを登録された場合には、年会費が割安になるほか、メーリングリスト（NPO-NET）に登録され、学会事務局からの情報の受信や会員間の情報交換をネット上で行うことができます。

ご入会手続きは、<http://janpora.org/>からお願いいたします。ご入会とあわせて、年会費をお支払いください。お振込の際は、郵便局備え付けの郵便振替用紙（払込取扱票）をお使いください。会費の受領が確認された時点で、会員となる資格が得られます。



【振込口座】

郵便振替口座番号：00950-6-86833

口座名称（加入者名）：日本NPO学会

【年会費】

12,000 円	一般会員（E-mail アドレスなし）
10,000 円	一般会員（E-mail アドレスあり）
6,000 円	学生会員（E-mail アドレスなし）
5,000 円	学生会員（E-mail アドレスあり）
100,000 円	団体賛助会員（4名まで登録でき、個人会員に準じサービスが受けられます。）

*学生会員料金の適用を受けるためには、在学証明書を学会事務局に郵送してください。

*学生会員は年度ごとに在学証明書をご提示ください。

日本NPO学会 ディスカッション・ペーパー制度ご利用案内

Japan NPO Research Association Discussion Papers

日本NPO学会では、ディスカッション・ペーパー制度を運用しています。ディスカッション・ペーパーとは、完成が近い作成途上の論文で、完成一歩手前の段階で内容を公開し、その分野の専門に近い方々から幅広くコメントをもらい、改訂・修正を加えて完成度を高め、学術誌に掲載することを目的に作成するものです。また、執筆者のアイデアを早めに公開し、模倣研究を牽制することも意図しています。一方、読者側のメリットとしては、最新の研究を学術誌掲載のはるか前に把握することができるという点が挙げられます。日本NPO学会のディスカッション・ペーパーもそうしたメリットを考慮し、会員サービス充実の一環として創設されるものです。

ディスカッション・ペーパーの改訂版を当学会機関誌「ノンプロフィット・レビュー」に投稿していただくことも可能です。ディスカッション・ペーパーの作成方法としては、印刷版の作成は行わず、PDFファイルを学会ホームページに掲載していくことによって公表いたします。

内容や意見は執筆者個人に属し、日本NPO学会としての見解を示すものではありません。

投稿は随時受け付けております。執筆者は以下の投稿規定に従ってください。

ディスカッション・ペーパー制度に関する詳細は下記専用ページをご覧ください。

(投稿に必要な書式もこちらからダウンロードできます。)

<http://janpora.org/dparchive/guideline.html>

会員の皆様におかれましては、日頃の研究成果の新たな発表の場として、ディスカッション・ペーパーへの投稿を是非ともご検討ください。

<ディスカッション・ペーパーに関するお問い合わせ>

ノンプロフィット・レビュー編集委員会

ディスカッション・ペーパー担当

office@janpora.org

投稿規定

1. 投稿資格

- 執筆者ならびに投稿者は日本NPO学会会員に限ります。共著の場合は、著者の中の最低1人が会員であれば足りるものとします。
- 執筆者が学生会員のみの場合は、「指導教員許可書」が必要です。指導教員の許可を得て、指導教員のサインを記した所定の用紙を提出してください。

2. 投稿上の注意

- 投稿論文は、日本語または英語で作成されたものに限ります。
- 投稿論文はすべて、WEB上のデータアーカイブに登録されます。
- 論文の取り下げ、差し替えは一切認められません。改訂版の投稿は可能です。(学生会員のみによる執筆論文の改訂版を投稿する際には、改めて指導教員許可書が必要となります。)

3. 投稿方法

- 所定のフォーマットに従って、表紙ならびに本文を作成してください。
- 論文(表紙と本文)はPDFファイルにして、メールに添付の上、下記日本NPO学会ノンプロフィット・レビュー編集委員会ディスカッション・ペーパー担当宛に提出してください。学生会員の方は、指導教員許可書を別途郵送で提出してください。原稿受理後、原則1週間以内に学会ホームページ上に公開します。
- 提出された原稿は完成原稿とし、校正は行いませんが、書式や体裁等に関して、編集委員会が必要に応じて修正を行う場合があります。

4. 著作権について

- 掲載されているディスカッション・ペーパーの著作権はそれぞれの著者に帰属します。著作権者に無断で内容の一部または全部を複写・転載することはできません。

Information

会員の皆様へ

◎住所等の変更があった場合はご連絡ください

学会登録内容に変更があった場合は、学会HPにあります変更届にご記入の上、学会京都事務局(janpora@nacos.com)までEメールでご連絡ください。
<http://janpora.org/tetuduki/renraku01.html>

◎会員継続をお願いいたします

日本NPO学会の運営は、会員の皆様の会費によってまかなわれています。2014年度会費のお支払をお願いいたします。郵便局備え付けのものを用いて、郵便振替口座 00950-6-86833 (口座名称: 日本 NPO学会) に振り込んでください。
<http://janpora.org/tetuduki/renraku03.html>

◎在学証明書は毎年提出してください

学会入会の際、学生会員の方には学生会員の資格確認のため、「在学証明書」を提出していただいておりますが、学生会員の方は、入会時だけでなく毎年「在学証明書」を提出していただく必要があります。学会事務局(〒602-8048 京都府京都市上京区下立売通小川東入る中西印刷株式会社内) までご郵送ください。

年次大会 懇親会のご案内

第18回年次大会に伴い、懇親会を開催致します。この場では、学会賞の表彰式など、盛り沢山の内容を企画しております。NPO研究者、実践者、企業や行政等関係者、そして将来を担う学生たちとの新たな出会いとネットワーク作りの貴重な機会となりますよう、多くの皆さまのご参加をお待ちいたしております。

【懇親会詳細】

日時: 年次大会初日

3月5日(土) 19:00~21:00

場所: 同志社大学室町キャンパス

寒梅館地下会議室A

参加費: 3000円

(年次大会参加費と一緒にお支払いが可能です。詳しくは本誌p.17をご参照ください。)

※学生セッションで報告等を行った学生(代表者および共同報告者)は、無料でご参加いただけます(大学院生は除く)。

NPOに関する新刊書を募集中!

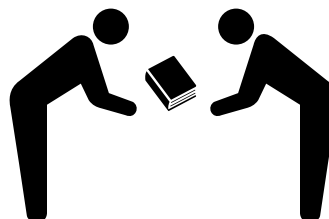
NPOに関する新刊書を紹介するコーナー、「JANPORA 図書館」では、ご紹介させていただく新刊書を随時募集しております。

ご紹介をご希望される方は、下記9項目をニューズレター編集事務局(E-mail: office@janpora.org)までEメールにてお知らせください。

- ・本のタイトル ・著者名 ・出版社 ・発行日
- ・価格 ・ページ数 ・本のキーワード3つ
- ・内容(100字程度の要約)
- ・書籍の購入ができるURL
(このURLからQRコードの作成をします)

また恐縮ですが、見本として1冊事務局宛にご献本ください。

※編集の都合上、ご希望の号にてご紹介できないこともございます。あらかじめご了承ください。



学会事務局とその連絡先について

【京都事務局(会員・会費担当)】

委託業務内容

- ・連絡先変更、退会、入会、会員登録情報の変更
- ・年会費に関するお問い合わせ(年会費請求、領収証発行等を含む)
- ・会員郵送物(ノンプロフィット・レビュー、概要集等)の郵送に関するお問い合わせ
- ・ノンプロフィット・レビュー購読に関するお問い合わせ
- ・学会刊行物バックナンバー発送についてのお問い合わせ

〒602-8048

京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷株式会社内

TEL:075-415-3661

FAX:075-415-3662

Email:janpora@nacos.com

【札幌事務局(総務担当)】

その他業務

- ・セミナーや研究会等に関すること
- ・ニューズレターの記事内容や投稿に関すること
- ・日本 NPO 学会賞に関すること
- ・学会刊行物(ノンプロフィット・レビュー以外)の内容に関すること
- ・npo-net に関すること(登録メールアドレスの変更も含む)
- ・学会ホームページに関すること
- ・日本 NPO 学会または NPO に関する取材に関すること

〒062-8605

札幌市豊平区旭町 4-1-40

北海学園大学法学部 樽見弘紀研究室内

TEL:011-841-1161(内線 2351)

Email:office@janpora.org

※機関誌『ノンプロフィット・レビュー』への投稿・購読などに関することは、
Email(ノンプロフィット・レビュー専用): npo-review@janpora.org をお願いします。

※詳しくは学会 HP

<http://janpora.org/information/jimukyokuiten2.html>

をご参照ください。

NPOの
風景(53)「稲むらの火」の松明^{たい まつ}

絵・文 初谷 勇



広川町庁舎から見下ろすと、庁舎前広場に松明をかざす梧陵翁像の背後に海が広がる。防災先進地と来訪する多くの見学・視察者には、様々な感想を触発する庁舎の立地。(広川町に北接する湯浅町の津波浸水想定区域内にあった湯浅広川消防組合消防本部(消防署・地域防災センター)は27年4月、高台に移転。)

嘉永7(1854)年はペリー再来航、日米和親条約締結、大火で内裏焼失、東海・南海地震続発などにより、11月末には「安政」に災異改元された。新元号を冠して今日に伝わる旧暦11月5日の安政南海地震に際し、稲むらに火をつけて夜闇のなか漂流者らに安全な場所を知らせた紀州藩広村(現・広川町)の濱口梧陵の実話は、その後ラフカディオ・ハーンの創作短編『生ける神』で、津波襲来を村人に知らせ高台に避難させる美談に転じ、同作に感銘を受けた和歌山県南部小学校訓導・中井常蔵の筆になる国語教材「稲むらの火」として昭和12年尋常小学校第五学年用国語讀本に採択され、大戦期を挟む10年間用いられた。

広川町では、昭和63年濱口家の寄附を受け濱口基金が設けられ、記念館建設を期する声もあったが、財政再建準用団体(昭54～平元)の只中、町単独の大規模な顕彰事業は望めず、平成9年、臨海部埋立地に町役場が新設されてようやく庁舎前に「稲むらの火」広場を整備した。翌10年、中央公民館に設置された高齢者大学は、梧陵の私塾「耐久社」にちなみ「耐久大学」と命名される。広川に嫁いだ娘の元へ夫と共に来住した南部出身の元教諭五味主基^{ごみすきこ}さんは、その一期生として歴史を学ぶこと1年、幼少時、南部で教科書を通じて知っていた「梧陵のような立派な人がいたのに、記念館も無

いのはいかなものか。実現に向け一日一円でも募金しませんか」と呼びかける。「何の話、しゅんやろ」。当初は戸惑い気味だった周囲も、「せっかく言ってるんだから」と「耐久大学」募金活動を開始。月1の講義日等に地道に募金を続け、50万円を町長に託した後、五味さんがさらに100万円を寄附。「本気なんや」と皆を驚かせ、そこから気運が高まったという。町民発の募金活動を受けとめ、同13年、町は濱口基金を積み増して複合文化施設整備基金に移行。こうした動きが梧陵の後裔・西濱口家の耳に入り、同15年、5千㎡の土地建物と濱口文庫7千冊の寄附を町に申し出る。その後、国・県の資金負担も得て、平成19年、西濱口邸を活用した「稲むらの火の館」(記念館・津波防災教育センター)が完成、開館した。

国内外から既に入館者25万人を数える同館の具体化は、外来の高齢女性の松明から始まった。その名は、大嘗祭で主基に神饌とする稲穂を育てる田(主基田)にちなむという。

「ある日、見慣れない入館者にどちらから?と聞くと、スマトラ沖大地震・インド洋津波被害の支援国会議で事務局を務めた国連職員だったこともあります」(崎山光一現館長)。

平成27年12月22日、第70回国連総会本会議は、梧陵ゆかりの11月5日を「世界津波の日」として制定する決議案を採択した。米国ニューヨークは、130年前、梧陵客死の地でもある。

第18回年次大会の参加申込はお済みですか？

第18回年次大会が、2016年3月5日(土)から6日(日)までの2日間、
京都・同志社大学今出川キャンパスで開催されます。

年次大会に参加希望の皆様は、**申込期限：2016年2月22日(月)**までに、学会HPから「オンラインでの参加申込」ならびに「参加費の支払」(①オンラインでのクレジットカード決済、または、②銀行振込)をお済ませください。

●学会のHPはこちら：

<http://janpora.org/>

●大会参加申込に直接アクセスするにはこちら：

<http://janpora.org/meeting/app/>

●「②銀行振込」を希望される方は、以下の「年次大会専用口座」への振込をお願いします(以下の銀行情報は参加申込と同時に自動送信される「受付メール」にも記載されています)。

銀行名	みずほ銀行
支店名	札幌支店
口座種別	普通
口座番号	1728612
口座名義	日本NPO学会

●参加費 [レギュラー料金]

(2月22日23:59までの申込&支払)

	大会のみ参加	大会+懇親会
個人会員	6,000円	9,000円
学生会員	4,000円	6,000円
個人非会員	7,000円	10,000円
学生非会員	5,000円	7,000円

※本大会でご報告いただく方につきましても、別途参加申込および参加費支払が必要です。

※「学生セッション」の報告者のうち、学生(学部生・大学院生)に限り参加申込ならびに参加費支払が不要です(=学生以外の学生セッション報告者の参加申込ならびに参加費支払は免除されません)。

JANPORA 図書館 ～注目の新刊から～

WeOwnTheCity

世界に学ぶ「ボトムアップ型の都市」のつくり方

Keywords: ●都市計画
●市民参加型
●ボトムアップ都市

フランチェスカ・ミアッツォ/トリス・キー=編 石原薫=訳
フィルムアート社発行(2015年9月)304頁 3,000円+税



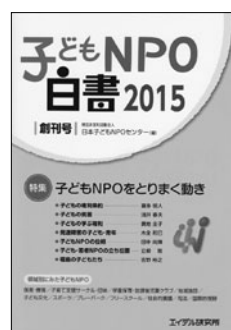
ボトムアップ型の都市づくりについて、現場の実践者の知恵とノウハウを徹底的に開示し、トップダウンがとるべき行動や知るべき歴史文脈を伝える。世界中5つの都市の事例と、有名建築事務所のインタビューも掲載。



子どもNPO白書2015

Keywords: ●子どもの権利
●若者の貧困
●子どもの育ちを支えるNPO

特定非営利活動法人 日本子どもNPOセンター(編)
エイデル研究所発行(2015年9月)263頁 2,500円+税



子どもを取巻く現代の課題に対して支援、サポートするNPOの活動実践を包括的にまとめた日本初の白書。今日の課題と向き合い第一線で活動し、何より子どもの現状を変えたいという子どもNPOの想いの詰まった1冊である。



地域おこし協力隊

日本を元気にする60人の挑戦

Keywords: ●地域おこし
●地方創生
●地方移住

椎川忍・小田切徳美・平井太郎ほか(編)
学芸出版社発行(2015年9月)288頁 1,800円+税



制度開始から6年。いま全国で1500人以上の地域おこし協力隊が活動中だ。隊員の成長、地域住民の変化、自治体職員の進化をおこす成功のポイントを、現役・OB隊員、自治体職員など70名が執筆。実践者たちのリアルな現場報告。

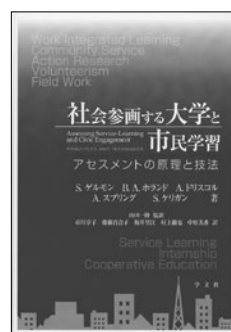


社会参画する大学と市民学習

アセスメントの原理と技法

Keywords: ●サービスマーケティング
●経験学習・経験教育
●高等教育・大学教育

山田一隆 監訳
学文社発行(2015年9月)215頁 2,500円+税



学生の学び、地域の活性化、教員の研究など、プログラムと効果の多面的な質的向上が問われるなか、継続的改善へのアセスメントを提起する。評価・活動の意義・視点・具体的方法等をさまざまな観点から解説した手引。



公共マネージメント 組織論で読み解く地方公務員

Keywords: ● 公共経営
● 地方公務員
● 組織マネジメント

田尾雅夫著

有斐閣発行(2015年3月)270頁 2,300円+税



組織論の第一人者の田尾先生が、「地方公務員」という資源をいかに経営管理すればよいかを独自の視座に基づいて説き明かしていきます。実務的知識も豊富に盛り込んで、いきいきと解説した新しい概説書です。



トリエンナーレはなにをめざすのか 都市型芸術祭の意義と展望

Keywords: ● 芸術祭
● 地方自治
● まちづくり

吉田隆之著

水曜社発行(2015年8月)263頁 2,800円+税



多大な税金を投入する大がかりな国際展の方向性は正しいのか。愛知県職員として、あいちトリエンナーレの企画コンペなどに携わった著者が地域コミュニティ形成の面での効果と批判を踏まえ、都市型芸術祭の今後の方向性に焦点を当て、その意義と継続の道筋を示す。



地域社会の未来をひらく 遠野・京都 二都をつなぐ物語

Keywords: ● 地方創生
● 官民協働
● まちづくり

遠野みらい創りカレッジ 編著

水曜社発行(2015年9月)227頁 2,500円+税



岩手県・遠野市と、富士ゼロックスが、行政・企業の枠組みを超え設立した「遠野みらい創りカレッジ」。地域の文化を今に生かす工夫や、地域が主体的に産業や文化を創生する工夫について歴史や伝統を尊重し、さらなる発展に向け市民目線で取り組んだ実践的な事例を紹介。



英国チャリティ その変容と日本への示唆

Keywords: ● 英国チャリティ
● 市民社会
● 日本への示唆

(公財)公共法人協会編

弘文社発行(2015年12月)347頁 3,800円+税



公益法人協会の研究プロジェクトを出版したもの。わが国の公益法人制度改革とほぼ同時期に進行した英国チャリティ改革の経緯とその後の変容を把握し、今後の我国非営利法人制度再構築へ示唆するものを探る。



新会員の紹介 YOUは何しに学会へ

東日本大震災後の東北に市民活動を根付かせたい



菊池 遼

東北大学大学院経済学研究科博士後期課程

私がNPO研究を志すようになったのは東日本大震災が大きく影響しています。震災が発生した当時、私は山形大学の財政学ゼミに所属していました。しかし、被災地でのボランティア活動が続けるうち、被災地の問題を解決するのに行政ができることには限界があると感じるようになりました。一方、被災地で活躍するNPOやボランティア団体の方々の姿を見て、これからは市民の力こそが社会を動かす力になるのではないかと考えるようになりました。そこで2013年4月からは東北大学の大学院に進学し、学問分野を変えてNPO研究の世界へと飛び込みました。

大学院に進学してからも研究活動をする傍ら、2013年12月に台風で被災したフィリピンでのボランティア活動への参加や、世界的に有名なプレゼンテーションイベントTEDがライセンスを与えて実施されるTEDxイベントの東北版TEDxTohokuの運営にも参加していました。その他にも、宮城県で映像を中心とした情報発信をしているNPO法人のメンバーとして活動し

ています。個人的な趣味ですが最近ではもっぱら一眼レフカメラに熱中しています。将来的には、これまでに学んできた映像や写真などのスキル・経験を活かして、NPOの弱点である広報力や販促、ブランディングについて支援するような活動を展開できないか模索中です。

肝心の研究活動ですが、2015年度は日本NPO学会の震災特別プロジェクトで被災地のNPOを回らせていただく機会をいただきました。震災前はNPOがほとんどなかったような地域にもその存在が認知されつつあります。「震災によって失ったものも多いが、得られたものも多い」とよく言われますが、東北に誕生したNPOの存在も震災によって得られたもののひとつといえるでしょう。しかしながら、いまだ東北の地で市民活動が根付いているとは言い難い現状です。同様にNPO研究においても東北では発展途上です。私は東北での市民活動を根付かせるため、これからも学問と実践、様々な角度から尽力していきたい所存です。

編集後記

春は別れの季節。ここ「日本NPO学会札幌事務局」でも、昨年の春以来、学会事務局移転の大仕事を一緒に走り抜けてくれたスタッフの小林彩香(樽見ゼミ4年生)が「一抜け」とばかり就職で東京に移ります。イマドキの学生らしくITベンチャー企業に身を投じようとしている彼女のこれからの人生を案じつつ、さーて、次なる救世主スタッフ現れよ!と念じるばかりです。小林さん、本当にお疲れ様でした。(樽見)

■日本NPO学会札幌事務局(総務)

〒062-8605 北海道札幌市豊平区旭町4-1-40
北海学園大学 法学部 樽見弘紀研究室
E-mail:office@janpora.org

■日本NPO学会京都事務局(会員管理・会計)

中西印刷株式会社(担当:小畑)
E-mail:janpora@nacos.com
〒602-8048 京都府京都市上京区下立売通小川東入る

■編集

発行人:田中弥生(日本NPO学会会長)
編集スタッフ:小林彩香・中野あかり・竹谷琴絵・樽見弘紀